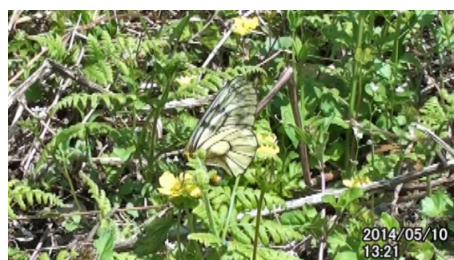


多くのチョウ愛好家が今でもウスバシロチョウという愛称を好むウスバアゲハは、外見上とてもアゲハ属には見えないが、その飛翔時の動きは確かにシロチョウ族ではなく、分類学的にはアゲハチョウの仲間となるため、ウスバアゲハという和名も使われる。近縁種が北海道にウスバキチョウとヒメウスバシロチョウの 2 種がいて、氷河期の生き残りだとされている。

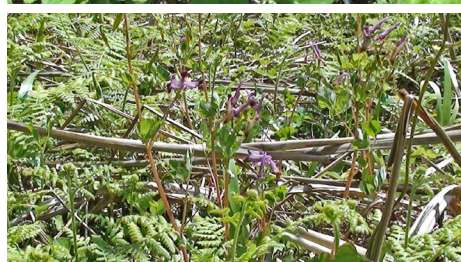
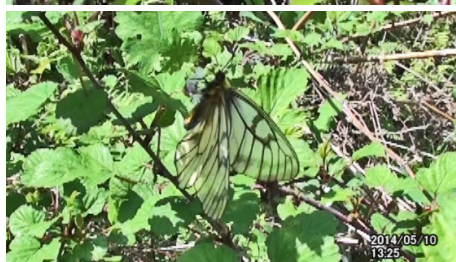
昆虫少年に名乗りを上げた小学校 5 年のとき、中学生となっていた次兄もチョウ採集に手を染めていて、仲間と出かけた高知市円行寺でウスバシロチョウをとらえて持ち帰り、三角紙に納められたきれいなチョウがグライダーのような飛び方をしていたと見せられたのが初めての出会いだ。何とかそのグライダー飛翔を目にしたいし、チョウそのものも標本として追加したいとの思いを募らせ、中学校の科学班メンバーとなって遠征した高知市鏡村小川口のレンゲ畑で初めてその優雅な飛翔を目の当たりにして感激。その後、大学 1 回生のときチョウ好きと分かって友好を深めることとなった地元京都在住の石田君が、ウスバシロチョウがたくさんいるところに案内するといって連れて行ってくれた滋賀県葛川梅ノ木というところで本種がまさに乱舞する光景を体験した。高知梶が森や鏡村小川口などで見たのは多くて 4.5 頭でいどで、生息地によっては本種が信じがたいほどの個体数をみることができることを初めて知る。

社会人となって神戸市に住んだ頃、ベルギーとフランスの蝶友と標本交換を始めていて、高知で僻地教育に情熱を注いだ父が赴任する各地域で母が野山を駆け巡ってチョウを採集し、その交換用の高知産チョウを数多く送ってくれたが、香美郡物部村岡内に本種が多産することを知り、子供を連れて帰省した際に足をのばして本種の乱舞を楽しむこともできた。チョウの探索種を定めることなく家族づれで訪ずれた兵庫波賀町や夢前町で偶然本種が多産地に遭遇し、何度か訪れてその群れとぶ様子をビデオ撮影もしたが、こうしたエッセイに添付採用できる画像がなかなかうまくえられない状況が続き、いつのまにか波賀町と夢前町、いずれの地でもチョウが激減し、それが異常繁殖したシカによる食草や吸蜜植物類の食害によることがわかって悲しくなる。

そして 2014 年 5 月、波賀町音水溪谷にもはや本種の姿はなく、かろうじて夢前町のごく限られた荒れ地で寂しげに飛び遊ぶ本種に出会う。ツマキチョウの♀も飛ぶその荒れ地にみられるムラサキケマンは数えるほどで、観察できた本種はわずかに 3 個体。キツネノボタンらしき黄色い花からキイチゴの仲間の花へとフワフワという感じの飛翔で場所を変えながら蜜を求める個体に絞っ

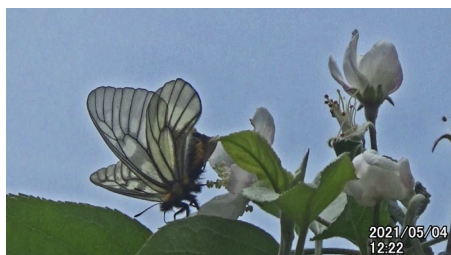


て追いかけてまわし、自然吸蜜の様子をなんとか映像としてとらえたが、数少ない食草ムラサキケマンの状況からも、今後の生息維持がかなり心配。

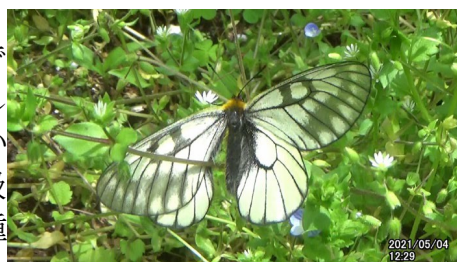


2021 年 5 月 4 日、久しぶりに遠征した兵庫県波賀町ではリンゴ畑を飛び交う複数の本種に出会えて感激。あちこちに農作物

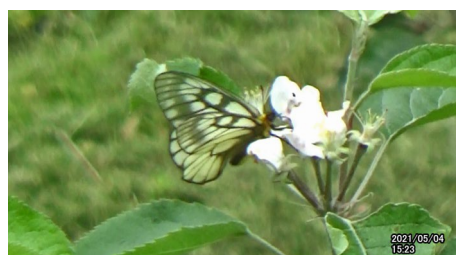
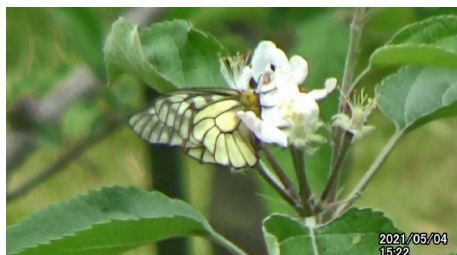
をシカから保護する柵や網が設けられており、それらのなかでかろうじて代をつないでいるムラサキケマンで本種も細々と代をつないでいるわけで、今年観察できる個体数はこのリンゴ畑だけで 10 個体はいただろうか。リンゴの花は咲き終わりに近く、まだ残っている花に蜜を求める本種を認め、ちょうど畑内の除草作業が終えた状況で、作業を終えた畑の主がいないが柵内へと入れる 1 か所が開いたままなのを幸い、リンゴに触れないようにしてビデオ撮影をさせてもらう。高い位置で吸蜜していた個体は、あとのビデオ記録編集時に初めて交尾囊が付された♀であることがわ



かるが、少ない食草とはいえ、たくさん産卵をして代をつないでほしいものだ。このリンゴ畑ではいきなり目の前で翅を全開にして休憩してくれる個体もいるが、残念ながら右前翅が少し破れている。30 年ほど前にもこの波賀町にリンゴ畑はあったが、本種が吸蜜をする場面に出会ったことはなく、貴重な体験となった。本種を追いかけて畑内を移動するさなか、足元のオオイヌノフグリの



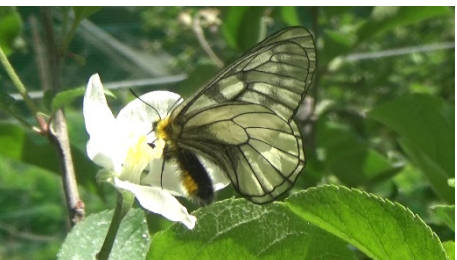
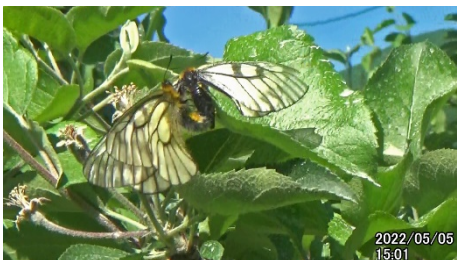
花にとまる羽化して間もない美麗個体に気づきその動きを追うと、まだ翅が十分に固まっていないのか、翅がゆがんでしまったりする。今では、やはりシカ害で激減しているサカハチチョウとの出会いを求めて別の渓谷へと転戦し、なんとか 1 個体との出会いを果たして戻ったリンゴ畑は、すでに入り口が閉ざされていて近くでの撮影がかなわない状態となっていたが、畑を見下ろせる位置から三脚なしの望遠で、今一度本種が蜜を楽しむ光景を撮影記録。ファインダー越しに



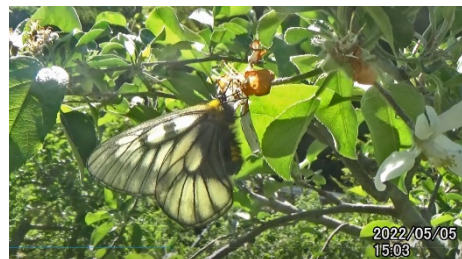
みるこの個体も、後翅鱗粉の黄色が濃くて羽化して間もない新鮮個体だとわかる。望遠撮影のために避けがたい手振れでときにはフォーカスが合わなくなったり、画面から肝心の本種の姿が消えそうになったりするが、初めての絶好のビデオ撮影機会を楽しめた。

May 5, 2022 西播磨の山岳部に遠征

リンゴ畑のウスバシロチョウは昨年の 15 時頃に撮影記録をとっており、そろそろその時間となったことから、この渓流を後にする。リンゴ畑は今年も入り口が開いており、花のほとんどが開き終わっているが、まだ残る花での花蜜を求めて多数頭のウスバシロチョウが飛び交っている。吸蜜



中の♀に交尾を迫る♂が拒否されてしぶしぶ飛び去る光景を二度もみるが、いやがった♀が転飛して休憩する際に後部済みだとわかる交尾囊が確認できる。また、3頭が絡み合う光景も見るが、ど



ういうわけで絡んでいたのかよくわからないうちに一気に2頭が飛び去ってしまう。畑の周りには電線があって、できるだけ人工物が映り込まないビデオ撮影をこころがけ、その中からリンゴの花に確かに口吻を伸ばしていると確認できる静止画像を切り取ってみる。

